

民研部会から

美術部会

子どもたちと教師にとって

真に役立つ教材の開発と研究

三村 彩子

四月からの部会の参加者はのべ八〇名

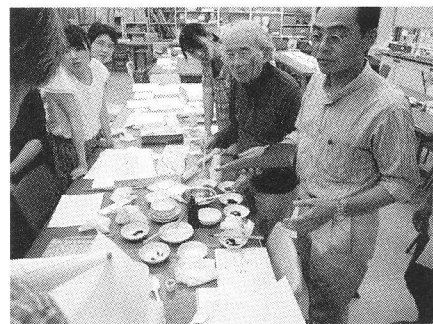
を超えました。保育園、幼稚園、特別支援、そして小中の仲間たちが、多忙化を極める日々の校務の中で日曜日の開催に参加するのは本当に勇気のいることだと思います。しかしこの多様な職場の子どもたちの作品を見たり聞いたり、語りあう中で明日へのヒントをもらう自分に気づき、新たな展開を考えまた一步を踏み出す、そんな力がわいてくる会になって

いるのかもと思います。

孤独の中での子育てが様々な問題を引き起こす状況下で私たちの側も成果を

求められ、数値で業績を示すことも求め

られています。子どもたちに何が必要かという観点での教材を工夫することより、無難に教材カタログのキットで失敗なく組み立てて終わりというような在り方で美術室や図工室、教室で鬱々としている仲間たちもたくさんいます。子どもたちは日々生活する中で、何を考え何を表現していくか一番根源となるべき教科であると直感的に感じるからこそ、作り出す喜びを美術や図工に感じるのだと言えます。だからこそ美術で本当に意味のあるものに取り組ませたいと日々悩むのです。こうした良心的な人々に支えられつつ、美術部会では毎回、実技講座を設定しました。実技を通して互いの技術の向上を図ることはもちろん、子どもたちに呈示することを想定してどんな授業を



組み立てられるか一緒に考えることで問題解決の糸口も見えてくることもありま

す。彫塑の講師をしてくれ

たMさんの「ラスコーやアルタミラ壁画は私たちのDNAに組み込まれている」という発言が次の例会の子どもたちの作品に生きてくるといったように、仲間同士で教育実践を作りあうという楽しさも味わえるようになってきました。

また美術教育を通した学校作りや学年への働きかけといった同僚性を学ぶ場としても部会は大切な場です。まだまだ運営上の課題をたくさん抱えつつも孤独の中で悩んでいる人たちがなんとかアプローチしたいと願っています。二学期以降は、より生活に根ざした実践をみんなまで考えていこうと計画しています。いつもと違う日曜日の過ごし方が明日への活力を生むかもしれません。東京民研美術部会は必見です。(杉並・桃井二小)